

戦争体験談(軍事教練など)

しもだけんいち
下田健一さん

昭和 16 年 12 月 8 日に第二次世界大戦が勃発したとき、私は小学 5 年生でした。戦争が激しさを増し、魚津でも食糧不足になりました。当時は、全てが配給制。成人 1 日分として米は 2 合 5 勺支給されましたが、食べ盛りの兄弟 4 人を抱えた両親は、魚津市郊外の上野方に畑を借り、さつまいもの栽培をして食べさせてくれました。食事といっても、まともな食事ではなく全て雑炊です。少しでも栄養を取るために、その中へさつまいものつるも入れ、食糧難を切り抜けました。当時の人たちは、みんな同じような状況でした。私が小学校を卒業し、昭和 19 年の春、魚津中学校（現在の魚津高校）に入学したとき、1 年生は滑川、黒部、入善、富山から来ている生徒が約 230 名ほどいました。まだ共学ではなかったので、全員男子学生です。その頃、一段と戦争が激しくなり、自給自足ということで学校林に炭を作ったものです。片貝川右岸の東布施にある炭小屋で焼いた 1 表 4 kg ある炭俵を中学生全員で各自 1 表担いで何回も学校まで運び、戦争に負けじとみんなでがんばったものです。

昭和 19 年、学校では軍国主義の教育となっていたので、体育の時間にはグラウンドで竹槍を持って相手を突き刺す訓練ばかり行っていました。

その頃、私は空に憧れていたもので、魚津中学校からたった 1 人選抜され、少年滑空訓練を受けることになりました。富山県で、この訓練を受けることができる滑空訓練所は 2 カ所あり、魚津の上野方の石垣平にあった訓練所には、私の他に県内の中学から希望して選抜された約 30 名ほどの生徒が集ま

り、夏の暑い時期に約1ヶ月、大変厳しいグライダー訓練の日々が繰り返されました。13歳の少年ですが、生活は軍隊と一緒に。毎朝きちっと起きて、布団をたたみ、その上に座り、軍人勅諭を言わなければなりませんでした。

「一（ひとつ）軍人は忠節を尽くすを本分とすべし。

一（ひとつ）軍人は礼儀を正しくすべし。

一（ひとつ）軍事は武勇を尚（とうと）ぶべし。

一（ひとつ）軍人は信義を重んずべし。

一（ひとつ）軍人は質素を旨とすべし。」

今でも覚えて、すべて自然に口から出てきます。幼い少年に軍人勅諭を言わせるとは…。とにかく当時は、質素で強くたくましくといった質実剛健の教育で、いかにも軍国主義が徹底していた時代でした。

グライダーの訓練は午前と午後に行われ、2機ある三角形のグライダーにはそれぞれ1名が乗り、両側から6人ずつで引っ張って、教官の「よしっ」という掛け声とともに後ろで押さえていた人が手を離すと空に向かってフーッとグライダーが上がります。私は体重が軽かったので、反り返ってしまわないように背中に砂袋をつけて訓練を受けました。あまり高く上がると操縦が危ないので、高さは30mと決まっており、飛ぶのも直線のみ。1ヶ月経った頃に、やっと右や左に曲がったりすることができるようになりました。訓練を終えると直線のみ航空3級免許証がもらえ、「君たちは少年航空兵として推薦する」と言われ、みんな胸を張って学校へ戻りました。

学校へ帰ると驚いたことに、生徒の手で掘られた防空壕がグラウンドの周り一面に掘られていて、先輩たちが避難の訓練をしていました。この防空壕は、幅4mくらいで、深さは体が沈む程度、屋根はなく5～6人が入れる大きさ

で、いつ敵の空襲を受けるか分からないので、その時にはここに避難するんだと、体育の時間に防空壕に入る練習をさせられました。体育の先生は、軍隊あがりの軍人さんで非常に厳しく、合図とともに自分の好きな場所に入って伏せなければならなかったが、遅いものは叱られて立たされました。

昭和 20 年、全校生徒が朝の朝礼でグラウンドに整列し、軍隊あがりの先生がちょうど訓示を言っていた時に、ドーンという大きな爆音が鳴り響き、生徒はその場に伏せたり、何人かは防空壕に逃げたものもいました。爆音は、富山市の岩瀬方面に投下されたものだと後で知らされましたが、魚津町と 40 キロも離れた爆弾の炸裂音がほんの近くに聞こえたのにはびっくりしたものです。

また、学校の運動会では父兄もたくさん見ている中、グライダーの試験飛行が行われるなど、今では考えられないような学校教育そのものが軍国主義教育となってきました。

戦争が一段と激しくなった頃には、ここ魚津へも都会からたくさんの疎開者が来ていました。私の家は、お風呂屋さんだったものですから、自宅近くの寺町というところにはお寺が 2 軒あって、そこへ疎開してきた小学生が 4 班に分かれてお風呂に入りになりました。疎開してきた子どもたちのお風呂は無料でしたが、みんな衛生面で不衛生な状態で、何人かは栄養失調による体ぶちぶちが体中にできていて、親から離れて暮らし、相当厳しい生活をしていただんだと思います。

20 歳になると身長・体重・聴力・視力、いろいろな面で身体検査があり、検査が終わって何日かしたら、甲級合格や乙級合格（当時は甲乙丙だったので）などの紙が送られてきました。私の父も、昭和 20 年春の終わりに 34

歳で初めて赤紙の召集令状を受け、舞鶴海軍隊に入隊しました。私自身もいざというときは、軍隊に入ってやってやろうという気持ちはありましたが、まだ幼いため、3級先輩たちでもまだ海軍や陸軍の兵学校にいて、戦地には行っていませんでした。そうして、町内には成人した男性が1人もいなくなり、町では残された女性たちによって連合婦人会が結成され、お年寄りや子どもたちを守ったものです。

昭和20年8月2日、風呂場の掃除を終えた母が大声で「敵機が来るぞ！」と子どもたちを起こしました。ラジオから聞こえてきたのは富山県に空襲警報発令のアナウンスでした。「大本営発表 敵機B29は、静岡県の御前崎南方300キロの海上を北上を続けており、愛知県・静岡県・岐阜県・石川県・富山県に空襲警報発令」というものでした。魚津町に発令される警報のサイレンは、魚津製作所のサイレンで「ブーブー」と町中に鳴り響いたものです。

その頃家には、父が庭に掘っていた防空壕があり、また近くには魚津町下新町（今の本町）諏訪神社前に町内の人々が20人くらい入ることのできる屋根付きの防空壕を掘って敵機襲来に備えてありました。

空襲警報が発令され、私は家の壕の中でB29の動きが気になり、ラジオにかじりついていました。B29は更に北上を続け、午前0時30分岐阜県から富山県に進入のニュースに私は壕を出て急いで海岸へと走りました。海岸では5~6人の人たちに混じって海越えに富山市の方向に目をやると、空が真っ赤に燃えている。空には焼夷弾を落としているB29が飛んでいるのがはっきりと見えました。富山市の上空で雨あられのごとく投下された焼夷弾は大きな袋の中に束になっていくつも入っていて、それが明るい一筋の光となって引き落ちていき、100~200mあたりで一気に散らばってバラバラと

落ちていく。その瞬間ほうぼうから火の手が上がり、町は火の海と化していく。その B29 が次々に富山湾を旋回し魚津に向かってくる。その B29 を撃ち落とさんと富山と石川の県境にある能登半島の石動山あたりに設置した探照塔が上がって B29 を照らす。合わせて高射砲を横から発射しますが、B29 の高度が高くて全然命中しないまま、あざ笑うかのように悠々と飛び去っていきました。富山大空襲の資料によると飛来した B29 は 174 機。投下された焼夷弾は、地方都市で最も多く、死者 2,737 人にのぼったと言われています。

私たち中学生もその 1 週間後に動員され、焼け跡整理として富山市に行きましたが、アスファルト道路には六角形をした焼夷弾の残骸が不発弾としてあちこちにめり込んでいて、それを足で蹴飛ばす命知らずの友達は先生から大目玉をくらっていました。富山の街は、跡形もなく燃え尽きて、戦争の恐ろしさをまざまざと痛感しました。

昭和 20 年 8 月 15 日第 2 次世界大戦の終結を国民に告げた玉音放送は記憶にありません。父は、舞鶴で終戦をむかえましたが、私の叔父は沖縄の洋上でフィリピンに行く輸送船に乗っていて、敵機の爆撃を受け、沈没して戦死するなど、戦争が残した心の傷は計り知れないものがありました。